

幼稚園教師に求められる資質能力

—幼稚園本調査の結果分析—

Research on Competence and Ability of Kindergarten Teacher

-Analysis of Survey about Kindergarten Teacher-

寅丸 尚恵*

西川 正晃*

濱田 格子*

Hisae TORAMAEU

Masaaki NISHIKAWA

Sadako HAMADA

濱名 浩**

林 鎮代*

森田 健*

矢田 正一*

Hiroshi HAMANA

Shizuyo HAYASHI

Ken MORITA

Shoiti YATA

抄 録

本稿は、学校をめぐるステークホルダーの人たちが教師に求める資質能力を明らかにし、それを実現するための教員養成および現職教育のプログラムを開発することを目的とした研究プロジェクトのうち、幼稚園教師に求める資質能力に関する本調査の分析結果をまとめたものである。この調査で、幼稚園教師に求める資質能力は、保護者と教師自身で差異が見られ、また小学校教師に求める資質能力とも差異が認められた。

はじめに

本論文は、教育総合研究所の2009年度プロジェクト「ステークホルダーが求める初等教育教師の資質能力とその養成課程」（研究代表者 濱名陽子学内研究員）の今年度の研究成果のうち、主として幼稚園の教師と保護者に対して実施した本調査の分析結果と知見をまとめたものである。

まずはじめに、この研究プロジェクト全体の研究の概要について紹介する。

本研究プロジェクトは、2007年度から3年間の研究期間を設定し、日本の教師とくに初等教育教師に対し、初等教育にかかわるいわゆるステークホルダーの人たちがどのような資質能力を期待しているかを明らかにし、その資質能力を大学の養成課程において養成していくためのプログラムを開発することを最終目標にスタートした。本年度はその最終年度にあたる。

1. 研究の背景

今日学校教育をめぐる複雑な諸問題の解決のために、教師の役割は一層重要になっており、その資質能力の向上は、行政や学校が早急に取り組まねばならない状況にある。変化し続ける社会で子どもたちを教育する教師の資質能力は、常に点検、更新していく必要があり、教員免許更新制、現職教員研修がスタートする今日、現代の学校教育にふさわしい教師の資質能力を、養成課程、現職教育においていかに育成していくかが喫緊の課題となっている。

* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

** 関西国際大学 教育総合研究所共同研究員

教員養成に関して現在このような問題を抱えながら、これまでの教師教育研究また教育社会学研究では、学校教育に関与する人たち、いわゆるステークホルダーが、実際に学校現場や教師に対しどのような要請をもち、いかなる資質能力を教師に求めているのかということに関する実態の把握は十分ではなかった。従って教員養成課程においても、将来の教師となる学生にどのような学力・能力を身につけさせる必要があるかを十分検討できないまま、ただ教師としての一般的で初歩的な能力を育成することに終始していたのではないかという問題意識が、本研究の根底にある。

教師の資質能力に関する社会の関心とその向上に対する社会の期待がこれほど大きくなっている現代にあって、教師の資質能力を具体的、実証的に明らかにする研究と、その養成プログラムを措定する作業が強く求められているといえる。

2. 研究の目的と概要

(1) 研究の目的と本年度の概要

1で述べた問題意識のもとに、本研究は、1) 教師(本研究では初等教育教師)の資質能力を取り扱った各種の資料や文献、またこの問題に関するこれまでの先行研究を収集し、そこで措定されている教師の資質能力を析出し、2) そこで析出された項目について、ステークホルダーの人々に質問紙調査及び面接調査を実施し、ステークホルダーの人々が初等教育教師に求める資質能力を実証的に明らかにし、3) そのような資質能力を大学の養成課程の中で養成するためのプログラムを開発することを研究目的とする。

本研究プロジェクトの研究期間は、2007年度から2009年度までの3年間を予定しており、最終年度である今年度は、このうち、1) 文献資料と先行研究の収集と分析、及び2) 予備調査からの結果の分析・検討、3) ステークホルダーへの質問紙調査の実施を行った。

(2) 今年度本調査の概要

前述したように、本年度の研究成果のひとつが、ステークホルダーへの質問紙調査の実施であった。

下記に予備調査の概要を紹介する。

①調査の目的

学校教育を取り巻くステークホルダーには、子ども、教師、保護者、地域の人々等が考えられるが、その中でとくに教師と保護者に対象を絞り、彼らがどのような資質能力を重要と考えているか調査を実施した。本メンバーは学校教育の中で、幼稚園を射程に調査を行った。

②調査対象とサンプル数

＜幼稚園教師と幼稚園児の保護者＞

教師については、尼崎市内の3園に依頼し、86人から回答を得た。

保護者については、教師と同園の保護者に依頼し、660人から回答を得た。

③調査時期と調査方法

実施時期は2009年12月であった。

調査方法は、教師については、各園に調査票を預け、回答済み調査票を回収する方法で行った。保護者については、担任を通じて子どもに調査票を持ち帰ってもらい、自宅で保護者が回答後、封筒に入れ封をした状態で担任に提出するという方法をとった。

④調査項目

調査項目を紹介する。

<教師用>

- 1) 幼稚園の教師に必要な資質能力の34項目について、「ぜひとも必要」から「まったく必要でない」まで4段階で質問した。
- 2) 同じく34項目について、「家庭で」「高校卒業までに学校で」「短大・専門学校等で」「大学の学部で」「大学院で」「教師になってから」「クラブ活動等課外活動を通して」「アルバイト等の就労体験を通して」「ボランティア等の社会貢献活動を通して」「必ずしも身につけなくてもよい」という形で、どこでどのように身につけるのがよいかを質問した。
- 3) 同じく34項目について、幼稚園の教師の資質能力としてとくに重要であると思うものを、1位から5位まであげてもらった。
- 4) 自分自身の資質能力を高めるための勉強をどこでしたいか。
- 5) フェース項目として、性別、年齢、教師としての経験年数、管理職かどうか、教師になるための勉強をどこでしたかを尋ねた。

<保護者用>

上記質問項目の1)から3)までは、教師用と同じ質問を行った。フェース項目として、性別、年齢、子どもの年齢を質問した。

(西川正晃)

3. 本調査の結果の全体傾向

(1) 幼稚園教師が必要と考える教師の資質能力

表1は、幼稚園教師に必要な資質能力に関する34項目の質問に対する幼稚園教師の回答を、強い肯定(「ぜひとも必要」)の比率の高い項目順に表したものである。

最も多かったものは「子どもが好きである」の89.7%であった。次いで2位に「子ども一人ひとりの個性を大切にする」、「子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる」(いずれも84.6%)が並んだ。第4位に「自らの資質や能力を高めようとする」の83.1%, 第5位に「子どもをひきつける表現力」の82.1%, 第6位に「保護者とのコミュニケーションがとれる」の80.8%, 7位に「だれとでも協力できる」の74.4%, 8位に「子どもの模範となるような言動」の70.5%, 9位に「同

僚とのコミュニケーションがとれる」、「子どもの関心を引き出しながら保育できる」、「子どもの失敗をおおらかに受け止められる」（いずれも 69.2%）と続き、ここまでの強い肯定のほぼ 7 割を超える項目となっている。

これら「ぜひとも必要」という回答の上位を見ると、まず子どもが好きであり、子ども一人ひとりの個性を大切に、子どもの目線に立ってコミュニケーションをとり、自ら資質や能力を高め、子どもをひきつける表現力を求めている、教師としての基本姿勢が強くうかがえる。

また一方で、「子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる」、「保護者とのコミュニケーションがとれる」、「同僚とのコミュニケーションがとれる」に加え、「だれとでも協力できる」が上位に並んでいる。これも周りのすべての人間関係が重要であるとの考えが強く意識されていることがわかる。子どもたちへの愛情が読み取れることと、コミュニケーションの大切さを十分に理解されている幼稚園教師の日常がうかがわれる。

一方、「強い肯定」の低い項目では、「国際社会で通用する語学力がある」が 9%、「地球的規模の問題への関心がある」が 11.5%、「情報機器が活用できる」が 16.7%となっており、教育現場に必要度が低いと思われる項目となっている。

（2）保護者が必要と考える教師の資質能力

表 2 は、保護者が必要と考える幼稚園教師の資質能力について、34 項目の質問に対する保護者の回答を、強い肯定（「ぜひとも必要」）の比率の高い項目順に表したものである。保護者が幼稚園教師に求める資質能力の第 1 位は、幼稚園教師が必要と考える教師の資質能力の第 1 位と同様に、「子どもが好きである」の 87.6%であった。次いで「子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる」で 84.2%、第 3 位に「子ども一人ひとりの個性を大切にする」の 76%、第 4 位に「子どもの関心を引き出しながら保育できる」の 73.7%、第 5 位に「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」の 71.5%となっており、ここまでの 7 割以上の保護者がぜひとも必要であると回答した項目である。

また下位の 3 項目は、幼稚園教師の回答と順位まで全く同じであった。現場にさほど必要でないとの考えが一致していた。

大きく差のあるものを挙げてみると、第 5 位の「うそやいじめに対して毅然とした態度をとる」が、教師の回答では第 14 位になっており、保護者の強い願いが読み取れる。逆に教師の第 4 位の「自らの資質や能力を高めようとする」が、保護者では第 20 位、6 位の「保護者とのコミュニケーションがとれる」が保護者では 17 位、第 7 位の「だれとでも協力できる」が、保護者では 18 位、第 9 位の「同僚とのコミュニケーションがとれる」が保護者では 25 位となっており、関心の違いが大きく表れている。子どもはしっかり保育してほしいが、保護者自らは園に積極的に関わる気持ちは薄いという、現在社会の一面であろうか。

表1 幼稚園教師が必要と考える資質能力

(%)

11	子どもが好きである	89.7
10	子ども一人ひとりの個性を大切にする	84.6
12	子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる	84.6
03	自らの資質や能力を高めようとする	83.1
01	子どもをひきつける表現力がある	82.1
13	保護者とのコミュニケーションがとれる	80.8
02	だれとでも協力できる	74.4
08	子どもの模範となるような言動ができる	70.5
14	同僚とのコミュニケーションがとれる	69.2
16	子どもの関心を引き出しながら保育できる	69.2
24	子どもの失敗をおおらかに受け止められる	69.2
27	教師としての使命感、情熱、意欲をもっている	68.8
23	子どもの評価が公正・的確である	65.4
06	嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる	60.5
05	自分自身が夢を抱いている	57.7
30	多様な考え方・見方を受け入れられる	55.1
07	憧れの対象となるような人間的魅力にあふれている	53.8
19	クラスを年齢に応じてまとめていける	53.8
20	生活指導上のアドバイスができる	53.6
29	社会的な規範を守る	52.6
17	保育技術が身についている	50
21	子どもの成長・発達に関する専門知識が豊富である	47.4
04	幅広い教養を持っている	46.2
15	保育内容についての知識が豊富である	46.2
22	子どもの心のケア・教育相談ができる	44.9
25	考えたことを実行できる	44.9
18	子どものしつけができる	42.3
09	得意分野をもっている	38.5
28	社会の一員として世の中の変化に敏感である	33.3
31	社会に貢献しようという意識が高い	26
32	地域の実情について深く理解している	19.2
26	情報機器が活用できる	16.7
33	地球的規模の問題への関心がある	11.5
34	国際社会で通用する語学力がある	9

注) %の数字は「強い肯定」で、「ぜひとも必要」と答えた比率

表2 保護者が必要と考える幼稚園教諭の資質能力

(%)

11	子どもが好きである	87.6
12	子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる	84.2
10	子ども一人ひとりの個性を大切にする	76
16	子どもの関心を引き出しながら保育できる	73.7
06	嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる	71.5
01	子どもをひきつける表現力がある	68.3
23	子どもの評価が公正・的確である	67.9
24	子どもの失敗をおおらかに受け止められる	67.5
08	子どもの模範となるような言動ができる	66.6
27	教師としての使命感、情熱、意欲をもっている	59.3
19	クラスを年齢に応じてまとめていける	57.7
29	社会的な規範を守る	53.1
15	保育内容についての知識が豊富である	52
22	子どもの心のケア・教育相談ができる	51
18	子どものしつけができる	48.3
17	保育技術が身についている	48
13	保護者とのコミュニケーションがとれる	47.7
02	だれとでも協力できる	47
30	多様な考え方・見方を受け入れられる	46
03	自らの資質や能力を高めようとする	42.2
21	子どもの成長・発達に関する専門知識が豊富である	35
07	憧れの対象となるような人間的魅力にあふれている	34.7
20	生活指導上のアドバイスができる	32.3
14	同僚とのコミュニケーションがとれる	31.1
04	幅広い教養を持っている	29.2
25	考えたことを実行できる	28.8
09	得意分野をもっている	25.4
05	自分自身が夢を抱いている	22.4
28	社会の一員として世の中の変化に敏感である	20.3
32	地域の実情について深く理解している	12.1
31	社会に貢献しようという意識が高い	10.7
26	情報機器が活用できる	7.3
33	地球的規模の問題への関心がある	5.9
34	国際社会で通用する語学力がある	2.8

注) %の数字は「強い肯定」で、「ぜひとも必要」と答えた比率

(矢田正一)

4. 幼稚園教師と保護者の「教師の資質能力」についての意識の差異

(1) 「質問1 幼稚園の教師にとって必要な資質能力」での両者の傾向

今回のアンケート調査の結果から、幼稚園教師の考える「教師の資質能力」と保護者の考える「教師の資質能力」にどのような傾向が見られるのかを考察してみたい。

アンケート調査の結果は前述の通りだが、これを教師の考える資質能力の上位10位までで比較してみると以下ようになる。

(※2位と9位は同率だったため複数になっている。)

＜幼稚園教師＞	＜保護者の順位＞
1位 子どもが好きである	(1位)
2位 子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる	(2位)
2位 子ども一人一人の個性を大切にする	(3位)
4位 自らの資質や能力を常に高めようとする	(14位)
5位 子どもをひきつける表現力がある	(6位)
6位 保護者とのコミュニケーションがとれる	(20位)
7位 だれとでも協力できる	(21位)
8位 子どもの規範となるような言動ができる	(9位)
9位 子どもの関心を引き出しながら保育ができる	(4位)
9位 子どもの失敗をおおらかに受け止められる	(8位)
9位 同僚とのコミュニケーションがとれる	(26位)

この結果から以下のようなことを推察することができる。

①上位3位までは教師保護者とも全く同じであった。

これは幼稚園教師とはまず子どもが好きであって、一人一人を大切にし、しかも子どもの気持ちの理解者であるべきという大前提が一致したと見てよいだろう。

②4位以下が教師と保護者で大きく異なっている。

ちなみに、保護者の考える4位は、教師9位の「子どもの関心を引き出しながら保育が出来る」であり、まだベスト10圏内ということでそう食い違いはないように見えるが、

5位に挙げられた「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」は、教師は14位ということで、これはどのように考えればよいだろうか。

③教師は保護者や同僚とのコミュニケーションに重点を置いている。

教師6位の「保護者とのコミュニケーションがとれる」7位の「だれとでも協力できる」9位の「同僚とのコミュニケーションがとれる」は、保護者はいずれも20位以下ということで、人と人との関わりについては思いのほか評価や関心度が低いと見る事ができる。これもなぜであろうか。

そこで、今度は、保護者の 12 位から 20 位までの 9 項目と、その項目に対応する教師の順位とを比較してみた。

＜幼稚園保護者＞	＜教師の順位＞
12 位 教師としての使命感、情熱、意欲をもっている	(12 位)
13 位 クラスを年齢に応じてまとめていける	(17 位)
14 位 自らの資質や能力を常に高めようとする	(4 位)
15 位 社会的な規範を守る	(19 位)
16 位 保育内容についての知識が豊富である	(22 位)
17 位 子どもの心のケア・教育相談ができる	(24 位)
18 位 子どものしつけができる	(27 位)
19 位 保育技術が身についている	(20 位)
20 位 保護者とのコミュニケーションがとれる	(6 位)

④子どものしつけはどこでする？

14 位と 20 位は先ほどの教師と保護者で大きく評価の分かれる項目として取り上げたが、そのほかはどうだろうか。ここで注目したいのは、保護者が 18 位に挙げている「子どものしつけができる」が、教師は 27 位とほとんど問題にしていないことである。

要するに、保護者としては幼稚園でしつけをしてほしい、裏を返せば家庭でしつけができないからということになりはしないか。心配な要素の一つでもある。

⑤保護者の意識と教師の意識のずれが結構存在する

ここに挙げた保護者の考える「教師の資質能力」は一部を除いてほぼ同じ順位か、大きく教師側が低い評価をしたものである。ここから読み取れるものは何であろうか。

⑥項目順位 24 位から 34 位まではあまり大きくは変わらない

情報機器の活用、社会貢献、環境問題、語学力などについては、両者とも「どちらかといえば必要」ということで、重要度はそう高くないと言えるだろう。

⑦あえて、結論を出すとするば………？

これだけの考察であり結論めいた方向性は出しにくい、一つ言えることは、幼稚園教師は概して真面目で、子どものために一生懸命考えて日々の保育を行っている様子がうかがえる。子ども、保護者、同僚、上司、地域の人たちとの人間関係を保ちながら、日頃からコミュニケーションに重きを置いて、自己研鑽に励んでいると言え、大げさだろうか？

一方、保護者も子どものためには一生懸命であり、幼稚園教師に対する期待も大きい。ただ得て

して園や教師にお任せという部分が見え隠れする点が気にかかる点ではあるが…。

いずれにしても、教師と保護者は、子どもを挟んだ車の両輪である。二つの車がスムーズに回転してこそ子どもは育ち、保育も家庭教育も上手く運んで行く。

今回のアンケート調査で見てきた問題点に、今後どのように取り組んで推進させて行くかが課題と言えるだろう。(森田 健)

(2)「質問2 教師の資質能力についてどこで身につけるべきか」での両者での傾向

教師・保護者共、資質能力を身につける場所について、10項目の選択肢を設けて質問を行った。ほぼ両者とも同じ傾向であった。

資質能力について「どこで身につけるか」1位から3位を挙げる。最も比率が高いのは1位の「教師になってから」(教師 35,6P 保護者 34,5P)であり両者とも同じ考え方が圧倒的に多く、教師の資質能力が身に付きやすい環境といえる。2位は教師「短大・専門学校で」(25,1p) 保護者は「家庭で」(31,7p)で6,6pの差があり家庭で身につける重要性を望んでいる。3位は教師「家庭で」(23,2p) 保護者は「短大・専門学校」(28,5p)で5,3pの差がある。2位3位の項目は両者とも同じである。「教師の資質能力をどこで身につけるか」は教師、保護者とも1位の「教師になってから」であり、次に「家庭で」「短大・専門学校で」と続いている。3位までの順位に違いはあるが項目は同じであり、教師になってからの責任と重要性も一致している。

教師に必要な資質能力についてどこで身につけるべきか

1位は、教師・保護者共に「教師になってからである」(教師 35,6p・保護者 34,5p)両者の差は保護者が(1,1p)で大きな差はない。保護者の視点は教師を応援している現実もある。教師は資質・能力を身につけるため学びながら問題意識も養われていく。実践の自己評価や見直しの繰り返しから新たな気づきがあり、遊びの展開や子どもの発想の豊かさに感動する機会も与えられる。

一人ひとりが違うから不思議、楽しい、等違いをプラスに活かすことも集団の質の向上である。保護者は年数が長いほど幼稚園のあるべき姿に詳しく、我が子も含めて教師の専門性に期待していることが分かる。幼稚園という小さな社会で教師や友達と向き合って生活する場であり、教師の豊かな発想や技術は専門性に裏付けられている。

2位に教師は「短大・専門学校で」(25,1p) 保護者は「家庭で」(31,7p)であり、保護者が「教師の資質能力」について「家庭で身につける」重要さを望んでいることになる。

「家庭で」身に着くことは生活空間、家族、地域との関わりがあるが、教師の資質能力をどこで身につけるかの判断は1か所に限らず様々な経験の中から身につけていくと思われる。このような現実の状況から限られた場所や人数でも教師に必要な資質能力は養われていく。

「短大・専門学校」では集中的に幼児教育の勉強を行い、実習も2年で終えるには集中して行う必要がある。凝縮された期間内に専門的知識も実践も重複して学べる事がプラスに作用している。必要な学びと技量を身につけることのできる最前線である。3位として、教師は「家庭で」(23,2p)

保護者は「短大・専門学校で」(28,5 p)と続き、順位の違いはあるが 3 位までに挙げられた項目は同じである。

選択肢の中に「必ずしも身につけなくてよい」項目があり教師(1,44 p)保護者(3,53 p)である。情報過多の現在に幼稚園教師として真っ白な心で向き合うことであろうか。

保護者と共に必要と考える資質能力

保護者と共に必要と考える資質能力は 1 位「子どもが好きである」と 2 位「子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる」であり共通の価値観である。保護者と教師の土台も共有でき、それぞれの立場から子どもを受容し成長発達の見守りや援助、子どもへの思いが一致していることである。次のステップへの期待も伺える。保護者も教師も同じ思いであり、この事実は教師や保護者の子どもへの思いが一致していることである。3 位以下も保護者は「子ども一人一人の個性を大切に」「子どもの関心を引き出しながら保育ができる」「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」である。教師は「自らの資質や能力を常に高めようとする」「子どもを引き付ける表現力がある」「保護者とのコミュニケーションがとれる」ことである。

教師に必要な資質能力は保護者との共通点が多く、子どもを介して保護者との協力体制が可能になることである。保護者との良好な関係から、子どもを中心に教師と保護者の協力体制ができることである。同じ思いで保護者も教師も子どもの「教師になってから」身に付けるものであると考えている。教師とは、どうあるべきなのか、これからはどんな教師が必要なのか、「教師の資質能力に関する調査」の結果(1 位から 5 位まで)教育現場で「教師になってから」身につけるものは、それまでの自分自身の学びや経験から、教師として新たな学びと責任を土台に、資質能力を身につけていくことになる。保護者との関係作りも大切である。幼稚園は教師が実践力や専門性に優れ、個々の子どもの特性が発揮され、豊かな遊びが展開し学びに繋がっていく場である。

教師は振り返りの自己評価や見直しも大切である。環境の再構築や学びの再構成による子どもの遊びの展開も予想しておくことが大切である。遊びの流れや区切りの必要性の判断も専門性の現れである。保護者の価値観を受容しながら教師の資質能力を発揮し、最高の教育(遊び)の場になることが目標である。幼稚園教師は子どもの基礎づくりの年齢に関わっていく立場であり教師の影響は大きく責任が重い。何故なら後でやり直せないからである。現実には少子化が与える子どもへの影響や、地域コミュニティの衰退から不安な母親も増えている。子育ての悩みに留まらず保護者の悩みも受けとめ、初めて親子を理解できるケースも多い。幼い頃から重ねてきた時間を振り返り、新たな目標に向かって努力することも必須条件になると考える。(寅丸尚恵)

(3)「質問3 質問1と2で特に重要だと思うもの1位～5位を挙げる」での両者の傾向

・ 1から5の表から、それぞれ高位1～3までを見てみた。

教師の資質能力として1位に挙げられた中で最も比率が高かったものは「子どもが好きである」

(教師 39,4 p, 保護者 42,0 p)であり、教師・保護者共に同じであった。その次に「子どもの個性を大切にする」(教師 15,5 p, 保護者 12,8 p)「子どもをひきつける表現力」(教師 11,3 p, 保護者 9,3 p)と続くのも同様であった。こうした傾向は、2位以下においても大きな違いは見られなかった。つまり、教師の資質能力として必要なことは、教師も親もまず「子どもが好き」であり、次に「子どもの個性」を大事にし、「子どもをひきつける表現力」を身につけたい(教師)、つけて欲しい(保護者)と子どもが直接関わる資質能力を願っていると言える。

そして、2位に挙げられた中で最も多かったのは両者共「子どもの目線に立つてのコミュニケーション」(教師 16,7 p, 保護者 18,8 p)と、ここでも一致している。ここまでは、両者共「子どもの立場で」という視点で答えていることが分かる。

・教師と保護者とで、やや温度差がある項目がある。

3位を見ると、最も多く挙げられたものは「保護者とのコミュニケーション」(教師 11,3 p)と「子どもの個性を大切にする」(保護者 14,0 p)と両者が分かれている。ここでは、教師は保育をする立場から「保護者とのコミュニケーション」も欠かすことのできない重要な項目と捉えており、保護者はあくまで「子どもの立場で」という視点から捉えている。「保護者とのコミュニケーション」が保護者の回答の3位以内にあらわれるのは、5位の1位(保護者 11,1 p)のみである。これは、教師と保護者という立場の違いによるものと、保護者側に教師には家庭の内情を話しにくい感情があることも考えられる。

これとは逆な例として、教師と保護者とでやや温度差が見られる項目がある。「子どもの失敗を受け止められる」は、保護者では4位の中の3位 9,6 p, 5位の中の2位 9,9 pと早くからあらわれているが、教師では5位の中で3位 7,2 pとあらわれている。保護者は教師の意識している以上に、子どもが園で失敗しても温かく受け止めてほしいとの願いを強く持っていることが分かる。

(4) 教師と保護者の意識の差が10 p以上の項目で比較して読み取れること

「質問1 幼稚園の教師にとって必要な資質能力」から見えるもの。

全34項目で「ぜひとも必要」と答えたパーセンテージを、教師と保護者で比較した。

・教師の「ぜひとも必要」と答えた項目は、保護者より多い。

教師が保護者より多く「ぜひとも必要」と答えたものは26項目あった。その差は最大で③「自らの資質や能力を常に高めようとする」(40.9 p 差)(教師 83.1 p, 保護者 42.2 p)であった。反対に、保護者のほうが多く「ぜひとも必要」と答えているものが8項目あったが、その差は小さく最大でも⑥「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」(11.0 p 差)(教師 60.5 p, 保護者 71.5 p)であった。

この結果からは、教師が専門家としての意識や責任感を強く持ち、保護者は子どもの立場に立って答えていることが読み取れる。

・教師と保護者の「ぜひとも必要」と答えた項目の違い

教師のほうが多く「ぜひとも必要」と答えている 26 項目で保護者との差の大きいものは、③の他にも⑤「自分自身が夢を抱いている」(35.3 p 差) (教師 57.7 p, 保護者 22.4 p), ⑩「保護者とのコミュニケーションがとれる」(30.9 p 差) (教師 80.8 p, 保護者 47.7 p), ⑭「同僚とのコミュニケーションがとれる」(33.1 p 差) (教師 69.2 p, 保護者 31.1 p), ④「誰とでも協力できる」(27.4 p 差) (教師 74.4 p, 保護者 47.0 p), ⑦「あこがれの対象となるような人間的魅力」(19.1 p 差) (教師 53.8 p, 保護者 34.7 p)などが目立っている。

保護者のほうが多く「ぜひとも必要」と答えている 8 項目の教師との差は⑥の他は 22「子どもの心のケア, 教育相談ができる」(6.1 p 差) (教師 44.9 p, 保護者 51.0 p), ⑮「子どものしつけができる」(6.0 p 差) (教師 42.3 p, 保護者 48.3 p), ⑯「保育内容についての知識が豊富」(5.8 p 差) (教師 46.2 p, 保護者 52.0 p)などがあつた。

この結果から、教師は専門性を高める上での保育全般の課題や長いスパンでの職業を意識していることが伺える。また、保護者のほうが多く「ぜひとも必要」と答えている 8 項目で教師との差が小さいのは、教師が保護者の要望を意識しながら寄り添おうとしている姿勢の表れといえる。しかし、保護者の方は教師の職業観や園運営への関心は薄く、自分や子どもに直接に関わる項目に関心が深い。「子どもの心のケア, 教育相談ができる」教師を望む保護者が「保護者とのコミュニケーションがとれる」ことを望む教師に「ぜひとも必要」と答える保護者が少ないという矛盾が見られた。『保護者が相談したい時はコミュニケーション』したいが、個人的なことにあまり立ち入られたくないという現代気質の表れと考えられる。

(林 鎮代)

(5) まとめ(本調査から見えてくるもの)

3・4 節にて幼稚園教師に求められる資質能力の全体的傾向と幼稚園教師と保護者の意識の差異について、ここで幼稚園教師と保護者の相互の立場から考察をする。

① 「保護者・同僚・だれとでもコミュニケーションがとれる」資質能力に関して教師が重要な資質と考えているのに対し、保護者はそれほど重視していないという評価の違いについて。

「質問 1 幼稚園教師にとって必要な資質能力」において、上位 3 位までは保護者と教師間に差異は見られなかったが、4 位以下で大きく異なつた。

教師が資質能力で必要と考えている第 6 位の「保護者とのコミュニケーションがとれる」第 7 位の「だれとでも協力できる」第 9 位の「同僚とのコミュニケーションがとれる」等、教師は保護者や同僚とのコミュニケーションに資質の重点を置いている。

一方、保護者が考える幼稚園教諭に求められる資質能力としては、いずれも 20 位以下ということで、教師のコミュニケーション能力については思いのほか低い結果となっている。

これは、教師と保護者の立場の違いで、教師の意図していることが見えていないことを意味している。つまり、働きかける主体と、働きかけられる客体の意識の違いといえないか。園児の年齢が低いこともあり、幼稚園教諭が子どもに連絡を仲介してもらうことは考えにくい。連絡をとことは、教師にとって様々な意味を持つ。今回改訂された幼稚園教育要領に、幼稚園教諭の役割に、「家庭との生活の連続性を図る」が挙げられている。

「心の拠り所としての家庭とのつながりを支える」、「家庭と連携し基本的な生活習慣を身に付ける」、「保護者の幼児期の教育に対する理解を得る」などがそれである。幼稚園教諭は、保育活動だけでなく、家庭や保護者との信頼関係やそれに基づく理解・連携、場合によっては親子共々を支えていく必要に迫られており、そこを重視してコミュニケーションに重点を置いているのではないか。

また、十分にコミュニケーションを取れない経験の浅い幼稚園教諭にとっても、幼稚園でのケガや忘れ物、トラブルなどの報告・連絡が保護者との信頼関係の基盤となり、ここを怠ると昨今話題になっているモンスターペアレントに象徴される理不尽な要求や強い苦情を突きつけてくる保護者になっていく怖さを知っているから、あらゆる教師がこの点を必要な資質と選択したのではないか。

一方、保護者は教師からのコミュニケーションの努力を当たり前のように感じている腑がある。卒園した保護者が、小学校の担任から連絡が少ないことに直面し、戸惑い、初めて幼稚園の教師からのコミュニケーションの有難さを感じたという例をしばしば耳にすることがある。

また、「保護者とのコミュニケーションがとれる」という項目に保護者が重きをおいていないのは、園での子どもの様子は知らせてほしいが、あまり立ち入った関係は望んでいない、他者と距離を保ちたいと考える今の保護者気質が垣間見られる。

幼稚園では教育課程に基づき保育されている。各自が好き放題保育をしているのではなく、計画の確認や指導の向上のための職員会議、チームとして職員で協力して準備などに取り組んでいるかなど、保護者は判らない故に、その重視する資質能に差が生じているのではないか。

幼稚園教師の仕事は子どもが登園してから降園するまでの時間が勤務であり、降園後はクラスの掃除をして昼過ぎに終業と思っている人もなかには存在する。保護者が「同僚とのコミュニケーション」を教師に必要な資質・能力として重要視していないのは、降園後の幼稚園でのチームとしての取り組みを知らないからではないか。

幼稚園では降園後に保育や種々の園務分掌など多岐に亘って仕事を進めていかなくてはならない。幼稚園の教師は、共に保育する同僚から教えられたり、教えたりと支えあっている。子どものことや保育のことを相談したり、アドバイスをもらったりするためにも、円滑な人間関係は必須と教師は考えているのであろう。

同様に、「誰とでもコミュニケーションがとれる」という項目の「だれとでも」という捉え方にも差が感じられる。保護者は、「だれとでも」は一般的な周囲の人々（例えば、地域の人など）をさす言葉として捉えているのではないか。対して、幼稚園教師にとって「だれとでも」とは他のク

ラスの保護者であったり、卒園児やその保護者、出入りの業者であったり、近所の住人等々、幼稚園にかかわる人間関係を重視しているからこそ、必要な資質能力と重視しているのではないか。

② 「子どものしつけができる」資質能力に関して幼稚園教師と保護者の重視の温度差について

「子どものしつけができる」資質能力を保護者は18位に挙げているが、幼稚園教師は27位とほとんど問題にしていない。何故「しつけ」を巡って、保護者と教師に意識の差異が見られるのか。「しつけは家庭ですべきもの」「しつけは幼稚園でも行うべきもの」と責任の所在を決め付けているのではないであろう。ただ、保護者自身困難と感じている「しつけ」は、教師にとってはプロとして当たり前の業務として捉えているからではないか。

教師は「しつけ」イコール「基本的生活習慣の確立」と捉える傾向があり、排泄、食事、衣服の着脱など入園までに家庭で繰り返し教えたり手伝ったりしながら身に付けていってほしいと考えている。

反対に、「まだオムツがはずれないので、幼稚園で取ってほしい」と教師に頼る保護者もいる。しかし、多くの保護者は、幼稚園という集団の中でしか身につけることができないものをも含めて「しつけ」と捉えているのではないか。

家庭で子どもの衣服をたいていは保護者が始末しているであろうが、幼稚園では一枚一枚畳んでしまわねばならない。また、家庭と違って幼稚園においては、配膳が済み、全員が席に着くのを待ち、「いただきます」を言って初めて箸がつけられる。「待つこと」「順番を守ること」「きまりやルールを大切にすること」など、他者と共に気持ちよく生活をしていく上で必要なことを家庭でしつけることは困難であるがゆえ、保護者が教師より、必要な資質・能力に選択しているのではないか。

幼稚園教諭にとっても一人の子どもに「しつけ」を行なうことは困難を極めるかもしれないが、幼稚園という集団教育の場では、モデルとなる子どもや丁寧に教え手伝ってくれる友達の存在もある。クラスや友達の教育力に助けられている分、意識が保護者よりも持ち難いかもしれない。

③ 「子どもの失敗をおおらかに受け止められる」と「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」に関して教師に必要とされる資質能力へ選択の教師と保護者の温度差について

この項目に関して両者の傾向を見ると、保護者と教師との差が見られた。

保護者にとっては、孤立した子育てのストレスから、子どもの失敗をおおらか受け止めることができない状況に置かれていると推測され、つい、カーッととなって叱ったり怒ったりする保護者自身の実態から、教師も同様に感情的になって、責められたり、心が傷つけられることを保護者が危惧している結果ではないか。

反対に教師が子どもの失敗に対しておおらかに受けとめることは、それほど努力を必要としない資質として捕らえているからではないか。教師は子どもたちの失敗を大切なものと認識しており、それが子どもの試行錯誤や周囲の友だちからの学びにつながり、失敗が子どもの成長の契機となること知っている。失敗を責めるのではなく、なぜ失敗したのか、どうしたらよいのかを一緒に考え、

導き出し、次の成功に導くことこそが、質の高い保育であるとの共通理解がある。

今回の改訂された教育要領の中にも協同的な活動や学びが挙げられているように、その子の失敗を理解し、友達と共に考え、そこから教えあい学びあうのが、幼児教育で重点あることを強く意識している。反対に「子どもの失敗をおおらかに受け止める」だけでは子どもの成長は望めない事もあり、時には教師が壁になって受け止める以外のかかわりの必要性も理解している。それがこの差になったのではないかな。

「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」という資質能力において、教師と保護者との差が生じているのも同様である。我が子がいじめられる、いじめる側になることは、保護者にとっては様子が判らないだけに、最も心の痛む状況であろう。嘘で言い逃れることも子どもの健全な育ちにはつながらず、教師に毅然と対処してもらいたいと望むことは、親として当然の願いであろう。

一方、教師は子どもの実態をよくつかんでいる。子どもがいじめられたと感じている要件の多くは、遊びや活動上のけんかやトラブルであり、悪意によるものは保護者が心配するほど多くないと実感しているのではないかな。

このけんかやトラブルも子どもの育ちには欠くことのできない大切な体験である。けんか、トラブル、嘘、いじめ等については、教師が毅然と解決するだけでは子どもは育たない。いずれ教師が介入せず、子ども自身で解決できる力を育てることが大切で、幼稚園の教師としての専門性も要求される。そこでは、いつも毅然としてばかりではなく、あえて我慢して見守ることも大切である。このアンケート項目が別の表現、例えば「子どものけんかやトラブルに適切に対処できる」ならば、教師のポイントがもっと上がっていたのではないかな。

④「教師の資質能力についてどこで身に付けるか」について

教師の資質能力についてどこで身に付けるかの1位は、教師・保護者共に「教師になってから」（教師 35,6 p・保護者 34,5 p）で大きな差はなかった。多くの保護者自身が高等教育を受けて社会で働き、出産・子育てをしている。保護者自身が子育ての大変さと難しさを体験的に理解している。教師の仕事の大変さをねぎらい、応援してくれている保護者も多く存在する。

入園後、母子分離できないで大泣きし、トイレも一人でいけない幼児を支え保育するのは大変困難である。保護者が教師に求める「子ども目線でのコミュニケーション」を取ったり、「子どもをひきつける表現力」を身につけたりするには、「子どもの立場で」子どもに直接関わることでしか身に付かない資質能力であろうと教師・保護者共々実感していると考えられる。

2位に教師は「短大・専門学校で」（25,1 p）保護者は「家庭で」（31,7 p）であり、保護者が「教師の資質能力」について「家庭で身につける」重要さを望んでいることになる。

『子どもが好きである』など教師の人間性については家庭でを期待し、専門的な保育のスキルは「短大・専門学校」で凝縮された期間内に専門的知識も実践も重複して学べる事が大切と見ている。

では、大学で何を身に付けるかと考えると、保護者が「ぜひとも必要」と答えているものが⑥「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」（11.0 p 差）（教師 60.5 p、保護者 71.5 p）であった。ま

た、「子どもの心のケア、教育相談ができる」(6.1p 差)(教師 44.9p, 保護者 51.0p),「子どものしつけができる」(6.0p 差)(教師 42.3p, 保護者 48.3p),「保育内容についての知識が豊富」(5.8p 差)(教師 46.2p, 保護者 52.0p)などがあげられた。大学では、より専門性の高い子ども理解や保育の知識が求められている。

この研究の最終的な目的は初等教育にかかわるいわゆるステークホルダーの人たちがどのような資質能力を期待しているのかを明らかにし、その資質能力を大学の養成課程において学生を望まれるべき教師へと養成していくためのプログラムを開発することにある。

教師が考える教師の資質能力と保護者が望む教師の資質能力の上位3位までは共通していた。「子どもが好きである」「子どもの目線に立ってコミュニケーションができる」「子どもの一人ひとりの個性を大切にする」である。

この3つは、子どもに対する愛情と子どもに向かう気構えと捉えることができる。これらは、高等教育の成果で身につくこともあるであろうが、目の前の幼児理解力によるところが大きい。実習等で子どもと深くかかわることから身に付けていく必要があるのではないだろうか。

4位以下には教師と保護者の選択に違いが見られた。保護者は、子どもの立場に立ち、自分や子どもに直接関わる事がらを重視しているが、日頃の様子が見えないだけに、イジメ、嘘、公平、失敗をおおらかに等、不安が見え隠れしている。

一方教師は、向上心を持ち、保育全般の課題に向けてプロとしての使命感を持った資質・能力を身につけようとしている。

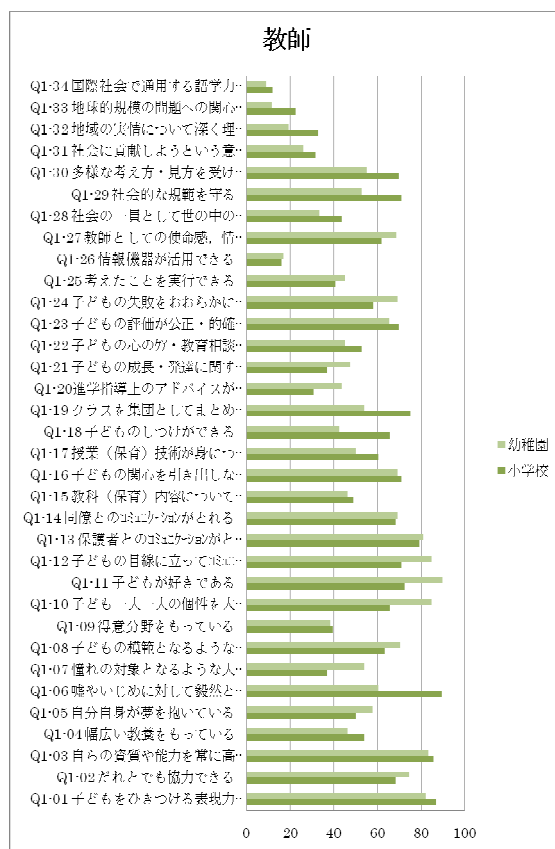
幼稚園教師と保護者の「教師の資質能力」についての意識の差異が“教師の専門性による子どもの育ちの見極め方の違い”であることが多いと推測された。これがどこからきて、それについてどう考えるかが、プログラム開発のキーになるであろう。つまり、幼稚園の教師には、幼稚園で起きていること、子どもの様子や日々の保育の意図などの説明する資質能力が必要ではないか。日々の保育や子どもについて相互理解を図ることのできる能力、それが保護者に教師への信頼と安心をもたらす。専門知識がいくらあっても、信頼の持てない教師に保護者は相談もしないし、理解も得ることはないであろう。

養成プログラムの開発にあたって保護者と連携することも視野に入れ、保護者に迎合するのではなく、今日的課題を踏まえた専門性をもって一生涯にわたる子どもの育ちを見通した上で、幼稚園の教育に対する理解を深めていくことが必要である。(濱名 浩)

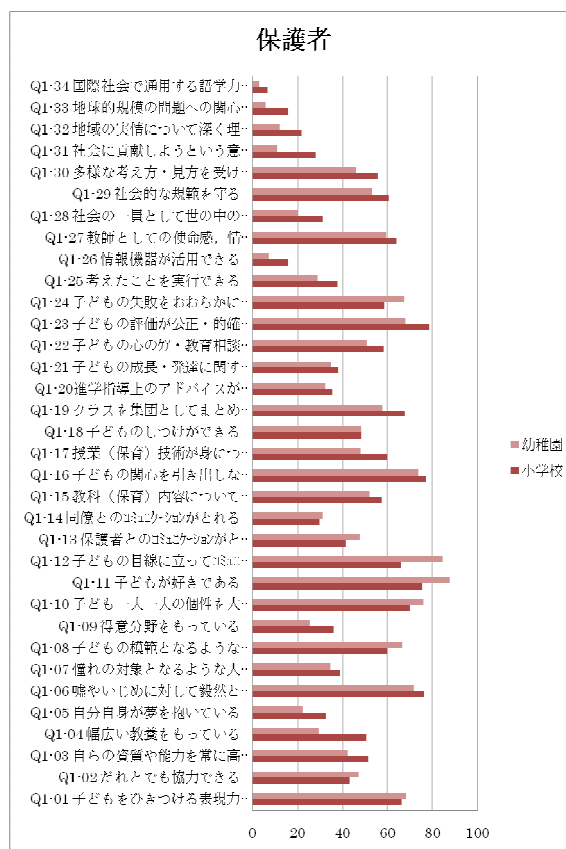
5. 教師に求められる資質能力の小学校と幼稚園の比較

小学校教師と幼稚園教師では、求められる資質能力にどのような違いがあるのだろうか。本論文の最後に、小学校と幼稚園のそれぞれの教師と保護者の回答を比較してみたい。

「ぜひとも必要」と答えた比率（教師の回答）（％）



「ぜひとも必要」と答えた比率（保護者の回答）（％）



上のグラフは、回答のうち「ぜひとも必要」と答えた比率について、小学校教師・幼稚園教師・小学校保護者・幼稚園保護者を比較のために並べたものである。

（１）教師の回答の比較

小学校教師のほうに多い項目、幼稚園教師のほうに多い項目を差の大きい順に挙げると以下のようになる。

＜小学校教師のほうに多い項目＞

嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる（差 29.0p）

子どものしつけができる（差 23.5p）

クラスを集団としてまとめている（差 21.2p）

社会的な規範を守る（差 18.5p）

多様な考え方・見方を受け入れられる（差 14.6p）

地域の実情について深く理解している（差 13.7p）

地球的規模の問題への関心がある（差 10.9p）

授業（保育）技術が身についている（差 10.5p）

社会の一員として世の中の変化に敏感である（差 10.1p）
得意分野をもっている（差 10.0p）
幅広い教養をもっている（差 7.7p）
子どもの心のケア・教育相談ができる（差 7.7p）
社会に貢献しようという意識が高い（差 5.6p）
子どもをひきつける表現力がある（差 4.7p）
子どもの評価が公正・的確である（差 4.3p）
国際社会で通用する語学力がある（差 2.8p）
教科（保育）内容についての知識が豊富である（差 2.5p）
自らの資質や能力を常に高めようとする（差 2.4p）
子どもの関心を引き出しながら授業（保育）ができる（差 1.9p）

<幼稚園教師のほうに多い項目>

子ども一人ひとりの個性を大切にする（差 18.8p）
子どもが好きである（差 17.3p）
憧れの対象となるような人間的魅力にあふれている（差 17.0p）
子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる（差 13.5p）
進学指導上のアドバイスができる（差 12.9p）
子どもの失敗をおおらかに受け止められる（差 11.3p）
子どもの成長・発達に関する専門知識が豊富である（差 10.6p）
自分自身が夢を抱いている（差 7.7p）
子どもの模範となるような言動ができる（差 7.3p）
教師としての使命感、情熱、意欲をもっている（差 7.0p）
だれとでも協力できる（差 6.0p）
考えたことを実行できる（差 4.1p）
保護者とのコミュニケーションがとれる（1.9p）
情報機器が活用できる（差 0.9p）
同僚とのコミュニケーションがとれる（差 0.8p）

これらの結果をまとめると、小学校教師には、「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」「子どものしつけができる」「クラスを集団としてまとめていける」といった子どもをしつけたり指導する力や、「社会的な規範を守る」「多様な考え方・見方を受け入れられる」「地球的規模の問題への関心がある」「社会の一員として世の中の変化に敏感である」といった社会人としてのモラルや自覚が求められ、教師の指導者としての役割意識が読み取れる。

いっぽう幼稚園教師には、「子ども一人ひとりの個性を大切にする」「子どもが好きである」「憧れ

の対象となるような人間的魅力にあふれている」「子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる」「子どもの失敗をおおらかに受け止められる」といった、子どもの立場に立った、子どもから好かれる資質が求められ、養育者としての役割意識が強いといえる。

また差の少ない項目は、小学校教師、幼稚園教師ともに重要と考えられている項目（両者とも回答比率が高い場合）と、どちらも重要度が低い項目（両者とも回答比率が低い場合）である。

小学校、幼稚園どちらにも共通して教師自身が必要と考える資質は、「同僚とのコミュニケーションがとれる」「保護者とのコミュニケーションがとれる」「子どもの関心を引き出しながら授業（保育）ができる」「自らの資質や能力を高めようとする」であり、反対に、あまり必要と考えられていないのは、「情報機器が活用できる」「国際社会で通用する語学力がある」である。

（２）保護者の回答の比較

小学校保護者のほうに多い項目、幼稚園保護者のほうに多い項目を差の大きい順にあげると以下のようになる。

＜小学校保護者のほうに多い項目＞

- 幅広い教養をもっている（差 21.1p）
- 社会に貢献しようという意識が高い（差 17.2p）
- 授業（保育）技術が身についている（12.1p）
- 社会の一員として世の中の変化に敏感である（差 10.9p）
- 子どもの評価が公正・的確である（差 10.8p）
- 得意分野をもっている（差 10.3p）
- 自分自身が夢を抱いている（差 10.3p）
- クラスを集団としてまとめていける（差 10.0p）
- 地球的規模の問題への関心がある（差 9.8p）
- 多様な考え方・見方を受け入れられる（差 9.6p）
- 地域の実情について深く理解している（差 9.5p）
- 自らの資質や能力を常に高めようとする（差 9.3p）
- 考えたことを実行できる（差 8.9p）
- 情報機器が活用できる（差 8.4p）
- 社会的な規範を守る（差 7.6p）
- 子どもの心のケア・教育相談ができる（差 7.3p）
- 教科（保育）内容についての知識が豊富である（差 5.4p）
- 嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる（差 4.8p）
- 教師としての使命感、情熱、意欲をもっている（差 4.4p）
- 憧れの対象となるような人間的魅力にあふれている（差 4.0p）
- 国際社会で通用する語学力がある（差 3.8p）

子どもの関心を引き出しながら授業（保育）ができる（差 3.5p）

進学上のアドバイスができる（差 3.3p）

子どもの成長・発達に関する専門知識が豊富である（差 2.8p）

<幼稚園保護者の方に多い項目>

子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる（差 12.2p）

子どもが好きである（差 12.2p）

子どもの失敗をおおらかに受け止められる（差 9.1p）

子どもの模範となるような言動ができる（差 6.5p）

保護者とのコミュニケーションがとれる（差 6.3p）

子ども一人一人の個性を大切にする（差 6.0p）

だれとでも協力できる（差 3.9p）

子どもをひきつける表現力がある（差 2.1p）

同僚とのコミュニケーションがとれる（差 1.4p）

以上の結果から、保護者は小学校教師に対して「幅広い教養をもっている」「社会に貢献しようという意識が高い」「社会の一員として世の中の変化に敏感である」「得意分野をもっている」「自分自身が夢を抱いている」といった子どものロールモデルとなれるような全人的な資質や、「授業（保育）技術が身につけている」「子どもの評価が公正・的確である」「クラスを集団としてまとめていける」といった教師としてのスキルを求めている。

いっぽう幼稚園教師には、小学校教師よりも「子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる」「子どもが好きである」「子どもの失敗をおおらかに受け止められる」といった、子どもにやさしい養育者としての教師像を保護者は求めている。

また差の少ない項目のうち、小学校、幼稚園どちらにも共通して保護者が重要と考える資質は、「子どもの関心を引き出しながら授業（保育）ができる」「子どもをひきつける表現力がある」であり、反対に重要度が低い資質は、「国際社会で通用する語学力がある」「同僚とのコミュニケーションがとれる」である。

（3）4者の比較とまとめ

小学校と幼稚園の教師と保護者の回答を比較すると、以下の点が明らかになった。

まず、教師に「ぜひとも必要」とされる資質の項目は、幼稚園よりも小学校の教師の方が多く、またどちらも保護者が望むよりも教師自らが必要と考える項目の方が多い。

「ぜひとも必要」と答えた比率が50%以上の項目数

小学校教師	22項目
幼稚園教師	20項目
小学校保護者	18項目
幼稚園保護者	14項目

顕著な違いが見られたのは「子どものしつけができる」という項目である。この項目が「ぜひとも必要」と答えた割合は、小学校教師のみ過半数以上(65.8%)で、他はいずれも40%台である。しつけとは本来、家庭教育の領域であるはずだが、小学校教師の多くがそれを教師が担う必要を感じている。

Benesse 教育研究開発センターの第4回学習指導基本調査報告書(2007年)によると、「授業中に立ち歩いたり教室外に出たりする児童」が「増えた」とする教師は、小1～小4生においては5割以上にのぼる。直面する児童の問題行動から、小学校教師が「しつけ」を自らの仕事と意識せざるを得ない実態が、ここからも読み取れるのではないだろうか。

小学校教師と幼稚園教師に求められる資質能力の違いは、教師自身は小学校教師には、子どもをしつけたり指導する力や、社会人としてのモラルや自覚といった、指導者としての資質能力を求めており、保護者からは、子どものロールモデルとなれるような全人的な資質や、集団把握や評価といった教師としてのスキルを求められている。

一方、幼稚園教師には、教師自身も保護者とともに、子どもの立場に立った、子どもから好かれる養育者としての資質能力が求められている。

また、どちらも教師自身は、同僚や保護者とのコミュニケーション能力が必要であると考えている。

今回のアンケート調査からは、小学校現場での「しつけ」の必要性を、保護者や幼稚園教師が共有していないように見受けられる。今回の調査では、幼稚園の調査対象が限定されているため、断定することはできないが、家庭教育の低下が指摘される今、初等教育の専門家として、幼稚園教師が「しつけ」についてもう少し意識を高める必要があるのではないだろうか。

(濱田 格子)

6. おわりにーまとめと今後の課題

以上、調査結果を基に多様な角度や関係性から考察を加えてきた。教員においても、幼稚園現場と小学校現場では、求める専門的資質能力の差異があることが浮き彫りにされている。また、教師と保護者の関係においても、丁寧に辿ることにより、子どもへのかかわり方や学びの意義などの相違が見えてくる。このような結果から、今後の課題として三点を挙げてみる。

まず第一に、幼稚園現場における教師と保護者の関係についてである。教師は保育の専門的力量を大学・短大や家庭はもちろん、現場においても形成し続けている。日頃の教師と子どもの関係性の

中で繰り上げられる保育の連続性の中で、形成されることが多いと誰もが認識している実態がこの調査からでも明らかである。こうした教師の力量形成、すなわち professional development が保護者からはっきりと目に見えるものではないのかもしれない。幼稚園教育は、生活の中で起こる葛藤やいざこざを通して学びを展開していくものである。表面的な解決をめざすことではなく、その解決を子ども自らの生活の中で行っていくその過程が学びの本質であるといえる。したがって、ある時には、援助として一方的に価値観を教師が指し示すのではなく、子どものいざこざを見守ることも教師の援助になる。保護者からすると見えにくいこの部分が、必要な資質能力の一つと認識させていない部分であるのかもしれない。もちろん、こうした資質能力の必要性を具体的に保護者に理解させる必要はないかもしれない。しかし、少なくとも、保育の中における子どもの「葛藤」や「いざこざ」が、幼稚園教育に於いてどのような意味をもつのかは、日頃から説明していく必要はある。こうした日頃からの保護者への丁寧な語り（Accountability）が求められるのではないだろうか。それを怠ることにより、子どもの発達を支える保護者と教師の関係は希薄なものへとになってしまう。

第二に、教師と大学との関係である。教師の専門的資質能力の多くは現場で培うものであることは本調査からも明らかである。しかし、そこで出てきた課題や問題を、教師の力量形成にしていけるためのトレーニングの場は決して現場だけとは限らないはずである。すなわち教師教育の可能性を今後探る必要が出てくるのである。現在の大学は、その目的の多くを学士力の涵養とし、アウトカムの質保障など高等教育の質的変換を模索している。その質的変換の一つの視点として、今後大学が多くの教師の学びに寄与する性質を持たなくてはならない。現場で出てきた課題や問題を、実践的研究の視点から、大学での知を現場の教師自らが求めていくような場になっていくことが必要なのである。大学の教員や学生、現場の教師などの協働や議論が日常的に行われる場であることが大学に今後求められなければならないのであり、そのような価値を現職教師が認める存在になっていく必要がある。

第三に、幼稚園と小学校の関係である。幼稚園教師と小学校教師の間には、求められる資質能力の差が本調査でも明らかになった。これは子どもの発達段階の違いだけでは説明しきれない部分もある。幼稚園で描かれためざす具体的な子ども像と、小学校入学期のめざす具体的な子ども像とがあまりにもかけ離れていることがないだろうか。これは、現在のカリキュラムが、幼稚園は幼稚園で、小学校は小学校で完結しているものが少なくないからである。この事実を生じさせる理由の一つが、校種が違えば他の校園の発達特性をあまりにも知らなすぎるという事実にあるといえる。

小学校の教師の中には、「学び」は小学校から始まるものであり、幼稚園は「遊び」の段階であると認識している教師も少なくはない。また、幼児期の学びを意識しようとしても、遊びの中にどのような学びがあるのか具体的に描ききれない場合もある。また、幼稚園教師は、遊びで培った学びが小学校以降の教育の中でどのように展開されているのかを検証することはほとんど無く、幼稚園修了以降の子どもの姿をイメージできない場合がほとんどである。

こうした、それぞれの教師の、子どもの時系列的な発達特性が十分に認識できていない中で、子どもに対しての支援・援助となっている。現在、幼小連携は非常に重要な研究フィールドとして注

目されているが、単なる交流活動に終始することなく、子どもの発達特性を丹念に辿るための、それぞれの校種における子どもの学びの事実を集積し、幼小の教師が話し合うことから始めなければならない。

(西川 正晃)

Abstract

In this article, we report the results of survey about the competence and ability of kindergarten teacher. This survey is a part of the research project to investigate the kindergarten teacher competence and ability. This project attempts to clarify the competence and ability that stakeholders over the schools seek and expect, and to develop a teacher training program and incumbent plan to train the qualified teacher. The results of the survey show that the competence and ability of kindergarten teacher that parents expect is different from ones that kindergarten teachers expect and the competence and ability of kindergarten teacher is different from the ones of elementary school teacher.